

## 〈過去は、現在なのだ…〉

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

こんなことが、本当にあったのか―

驚きあきれ、詳細を知るにつれ背筋が寒くなり、そして考え込む。恐ろしいのは、犯人もさることながら、何の疑いももたずに騙され、命令のままに整然と（ロボットのよう）に残虐行為を遂行した周辺の人間たちだ。驚くべき実話の映画化である。

第二次世界大戦末期の一九四五年四月、敗戦色濃いドイツでは至るところで、戦いに疲れた兵士らの軍規違反が相次いでいた。部隊を脱走して荒れ地を彷徨う兵士へロルト（マックス・フーバツヒャー）もその一人。飢えと寒さに震えながら逃げるうち、打ち捨てられた軍用車両の中に一揃いの軍服を発見。寒さをしのぐように着てみると、立派な将校服だ。物陰から現れた兵士に「部隊からはぐれました。お供をさせてください」と言われてその気になり、自らをドイツ軍大尉として振る舞い、彼を運

転手として従えることに。

行く先々で脱走兵やごろつきの集団に出会っては尊大な態度で配下に収め、次第に奇妙な寄せ集め集団へロルト親衛隊を形成してゆく。集団にそぐわない者や役に立たない者は即座に射殺する。本物の憲兵隊に遭遇すると「ヒトラー総統から直々の任務を遂行中だ」と嘘をつき、右手を上げて「ハイル・ヒトラー（ヒトラー万歳）―」で身元発覚の危機を切り抜ける。こうして、わずかな数日で圧倒的な権力を身に着けたへロルトを誰一人疑う者はいなかった。不安で寄る辺ない我が身を強力な権力の下に委ね、集団のなかで団結して同じ方向へ進んでいくことで安心を得たい、といった様子なのだ。

組織が肥大し、経験を積みにつれて、へロルトは常軌を逸していった。新たに辿り着いた荒野の収容所には、（ユダヤ人ではなく）軍規を犯したドイツ軍

の兵士らが収容されていた。彼らは脱走兵、略奪者ら中身はへロルトの隊員と変わらぬ罪で囚われた者だったが、数も不満も膨れ上がる一方で、警備隊長は「すぐに始末するよう、総統にとりなしを」と強く訴える。へロルトが収容所長の反対を押し切って即座に実行したのは、とてつもなく残酷かつ、効率的な行動だった。囚人ら自身に巨大な深い穴を掘らせて、三〇人ずつその中に押し込め、機関銃で容赦なく大量射殺する。これを三回繰り返し、たった一日で約九〇人を処刑したのだ。

ナチスのユダヤ人大量虐殺は歴史の汚点だが、同様の虐殺はドイツ人自身にも行っていた。この場面を演じた俳優も監督自身も「一度は精神的に参ってしまった」（シュヴェンケ監督）という。

連合軍による突然の猛爆撃を生き延びたへロルトは逮捕され、翌年処刑された。まだ二二歳の若者だった。制服が容易に権力と結びつくメカニズム、未熟な人間が権力を握る恐ろしさ、保身から権力に盲従する寄らば大樹主義：これはドイツ―昔のナチス時代の話に限らない。独裁者を支えるのは権力をもたぬ普通の市民で、その構造の闇は現在もあちこちで渦巻いている、と映画は訴えている。

### 『ちいさな独裁者』

ドイツ映画 (119分)

監督：ロベルト・シュヴェンケ

出演：マックス・フーバツヒャー、ミラン・ベシエル、フレデリック・ラウほか

2月8日よりヒューマントラストシネマ有楽町ほか全国順次ロードショー

©2017-Filmgalerie 451, Alfama Films, Opus Film

